

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：82662

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02404

研究課題名(和文) 多様な公演分野別集計を可能にする日本の商業演劇公演データベースの整備

研究課題名(英文) Construction of a database of Japanese commercial theater performances that enables aggregation by various performance fields

研究代表者

坂部 裕美子 (Sakabe, Yumiko)

公益財団法人統計情報研究開発センター・その他部局等・研究員

研究者番号：50435822

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本の商業演劇史を多角的な視点から俯瞰できるデータベースを作成することを目指した。そもそも公演記録のデータ化がほとんど進んでおらず、公演記録収集とデジタルデータ作成に長時間を費やしてしまったため、日本の演劇公演データについてはいくつかの大劇場の個々の公演データ作成に留まってしまった。

しかし、「多角的な視点」の追究として、本研究期間中に、ヨーロッパでのオペラ公演や国内のクラシックコンサートの演目データベース作成に関する共同研究が開始され、さらに広範な分野横断的な課題把握ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでに自身が専門外としてきた分野のデータ整備にも積極的に携わることで、公演データベース整備には分野を超えて共通の課題がいくつもあることが分かった。

国内では他にバレエなども公演データベース作成が進められているので、今後は様々な分野のデータ作成担当者との研究成果及び課題を共有し、まだ発展途上にある「公演データベース」の利用価値を高めていきたい。

研究成果の概要(英文)：The goal was to create a database that would provide an overview of the history of commercial theater performances in postwar Japan from multiple perspectives. Since there has been little progress in the data compilation of performance records, and we spent a lot of time collecting performance records and creating digital data, we were limited to creating database for each of several large theaters.

However, in pursuit of "multifaceted perspectives," joint research on the creation of a database of opera performances in Europe and classical concerts in Japan was initiated during this research period, enabling an even broader, cross-disciplinary understanding of the issues.

研究分野：文化経済学

キーワード：商業演劇 データベース 歌舞伎 宝塚歌劇団 時系列分析 統計分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者はこれまでに、(公社)日本俳優協会による「歌舞伎公演データベース」の制作協力およびこれを用いた集計・解析など、主に伝統芸能分野の各種興行データ整備・集計を行ってきた。その際、定期的に歌舞伎が行われるレベルの大劇場では、近年見かけなくなってしまう商業的色彩の強い演劇(大女優を看板に据えた演劇や、テレビドラマの舞台化など)も盛んに上演されていることに気づいた。もちろん旧来の新派などの公演も続いてはいるが、大劇場の上演演目の推移を長期的に追ってみると、例えばある時期からは新派の定期公演がなくなってしまう(ちなみに新派は、近年は規模の小さい劇場のみで上演されている)、スーパー歌舞伎が最高潮だった頃は1年の間に複数月の公演が行われているなど、ある程度長期的、網羅的に上演記録が整備されれば、様々な演劇ジャンルそれぞれの盛衰が把握できるのではないかと考えるようになった。しかし、そのようなデータベースが存在しなかった。

(2) また、かつて明治座や新宿コマ劇場で盛んに行われたいわゆる「歌手芝居」は、芝居の演目には歌舞伎や新国劇のものを継承していたこと、そして、平成中期頃までは定期的に1か月の公演が打てるほど隆盛だったにもかかわらず近年は衰退が著しいことなど、演劇史的に大変興味深いジャンルであるが、大衆的すぎると判断されたのか、演劇学の分野ではほとんど注目されてこなかった。このような、従来の研究では必ずしも重要視されてこなかったような多様な観点からの分析にも耐えられる(例えばそれらを「その他ジャンル」と扱わない)ようなデータベースが欲しいと考え始めた。

(3) 筆者はこれまでも、各分野のデータがある程度整備されるごとに、これを様々な視角から集計して幅広い分野の学会等で報告し、演劇学における「定量分析」という研究手法の普及に努めてきたつもりなのだが、こちらの進捗は未だ道半ばであった。

2. 研究の目的

(1) 研究を進めるに当たっての最大の問題は、公演記録デジタルデータが存在しないことである。そこで、公演記録をデジタルデータ化し、各種の集計が可能な形に整備することで、公演データ活用の可能性を広げる。

(2) 実際に資料を確認すると、公演データは作成元独自のスタイルで整備されていることが多く、例えば、重要な公演情報が含まれることがあるため省略できない「備考」の定義が作成元によって異なり、実際の収録内容が広範すぎる、などの問題がある。これらを吟味し、分野横断的な比較が可能になるようなフォーマットを構築する。

(3) 従来から整備を続けてきた落語(主に東京の寄席定席)や宝塚などのデータについても、引き続き更新、分析等を進め、データ活用の利点とデータ保存・整備の重要性を関係者や研究者により強く訴求していく。

3. 研究の方法

(1) 作業効率化のため、まずは既存のデジタル化された公演データを探した(劇場等の公式HPの奥深くの階層にひっそり収録されている場合がある)が、発見できたのはごく一部だったため、これまでに書籍等の形でのみ公開されてきた、企業別、分野別もしくは劇場別の書籍データと「演劇年鑑」のデジタルデータ化を始めた。しかし、結果的には本研究期間中には縦書きの和文の読み込みに長けたOCRソフトを見つけることができず、一部の年次のデータ化に留まってしまった。近年は十分な能力を備えたOCRソフトが順次開発されており、今後も引き続きこれらの活用およびデータ化を考えていきたい。

(2) 本研究においては「公演データを用いた定量分析」という研究手法の提示も重要な柱になっている。そのため、学会報告等を積極的に行う。本研究期間中に、「人文学・社会学分野の各種記録のデジタル形式での保存」を取り巻くあらゆる課題について考察する「デジタルアーカイブ学会」が発足したので入会し、記録保存にまつわる最新の情報収集にも努めた。

4. 研究成果

(1) 大劇場公演のデータ整備

新橋演舞場、明治座、日生劇場の劇場史をもとにデータを整備し、それぞれの劇場の分野別年間上演比率を新派、新国劇、松竹新喜劇、前進座の上演史と比較したところ、活況期と大劇場公演比率の高い時期の重なりが確認できる分野があった。また、日生劇場の公演記録を整備する過程で、日本におけるミュージカル上演黎明期のデータに触れ、ミュージカルやレビューについての上演記録整備の必要性を感じた。

(2) 伝統芸能興行データを用いた比較分析

東京の寄席定席興行出演者には大きな偏りがある、ということは従来から把握していたが、他分野の興行と比較して具体的にどのくらいの差があるのかを示すため、2018年の東京の寄席定席（落語協会主催興行、落語芸術協会主催興行）、上方落語の寄席定席、吉本新喜劇それぞれのプログラム出演予定者登場回数を集計して比較した。ジニ係数は落語協会主催興行が最も高く、その次は吉本新喜劇だったが、落語協会主催興行のジニ係数の高さは突出していた。

(3) 宝塚歌劇団公演に関する研究

宝塚は各種公演記録の保管・公開についてはトップレベルで、過去の公演スタッフデータを遡ることも可能である。そこで、1970～2018年の公演別演出担当者データを作成し、演出家のライフサイクルについての考察を行った。

また、これまでに行った全在籍者の在団期間集計について、集計対象データを2022年まで拡張の上、書籍原稿として取りまとめた。

(4) 劇団協議会データ作成・分析

文化庁のHPにかつて掲載されていた「文化芸術関連データ集」にある「演劇公演」の回数データは、商業演劇のデータをほとんど含まない、(公社)日本劇団協議会への加盟団体の公演数データであった。このため、この数値では日本全体の演劇公演の推移を示しているとは言い難いのだが、日本劇団協議会加盟団体には活動期間の長い新劇の団体(文学座や俳優座など)が多く加盟しており、この公表データの詳細分析にも意義があると考え、現・日本芸術文化振興会の米屋尚子氏と共同研究を行った。これにより、コロナ禍でも公演回数を減らさなかった演劇鑑賞団体主催公演の重要性が描出された。

(5) 他分野のデータベース整備研究との協働

本研究期間中に、神戸大学の岡本佳子氏が研究代表を務めるヨーロッパのオペラ上演史の研究チームに加わることになり、これまで知ることのなかった西洋文学史、西洋音楽史的観点からのオペラ研究の一端に触れ、「汎用的公演データベース」のあり方について、新たな知見を得ることができた。また、このチームでの研究で日本のオペラ公演データの集計を行うことになり、オペラ公演の現状を知るとともに、この分析過程が、独自の手順を辿っている、と認識していた歌舞伎の公演集計に酷似していることに気づいた。

さらに、仙台大学の山口恭正氏による、日本のクラシック公演データベース整備の研究にも加わるようになった。クラシック公演データ分析は既にある程度「こなれた」研究テーマのようで、数多くの研究者によるデータ整備や分析手法の蓄積があり、曲名の表記ゆれが出ないよう、世界共通で使える標準曲名データベースが完成されていたのには驚いた。演劇公演のデータ整備もこの域まで達したいものである。

(6) コロナ禍の影響の提示

本研究は「日本の演劇興行の時系列推移」を明示することが大きな目的となっており、本来であれば演劇業界全体がコロナ禍で受けた打撃がいかに大きかったか、このタイミングでこそ提示したかった。しかし、乗り越えるべき課題があまりに多く、同一基準で長期時系列データとして公表できるレベルにまでは整備が及ばなかった。

それでも、可能な範囲のみでも可視化すべく、既にある程度データの取りまとめができていた「宝塚」と「歌舞伎」についてのみ、1970～2020年(8月までに実現した分のみ)の公演回数時系列データを作成した。この2分野だけでは、業界が受けた打撃の大きさが視覚的に伝わるものになったと確信している。

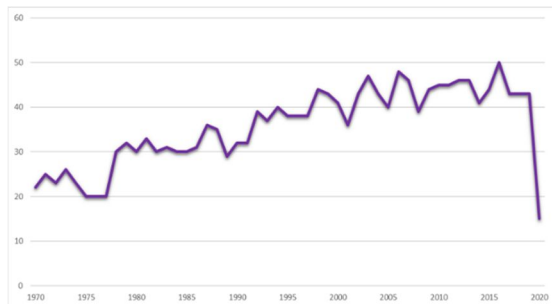


図1 年間公演回数の推移 - 宝塚

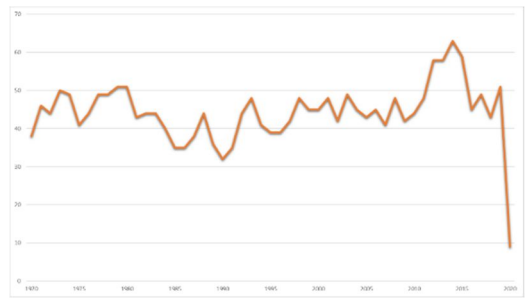


図2 年間公演回数の推移 - 歌舞伎

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 坂部 裕美子	4. 巻 20
2. 論文標題 宝塚歌劇団員の現役活動期間についての分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 感性工学	6. 最初と最後の頁 148-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5057/kansei.20.3_148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 4
2. 論文標題 落語の寄席定席番組データの活用と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24506/jsda.4.s1_s1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 2019
2. 論文標題 デジタルアーカイブを用いた演芸興行出演機会の不平等度に関する検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 1
2. 論文標題 歌舞伎およびその後継分野の劇場公演回数の推移	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化統計研究会最終報告書	6. 最初と最後の頁 239-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 4
2. 論文標題 データで見るタカラジェンヌ - 「在団期間」と「退団」についての集計 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 199-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.4.2_199	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 -
2. 論文標題 SASを用いた吉本新喜劇 (本公演) の現状分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SASユーザー総会2018論文集	6. 最初と最後の頁 327-336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 19号
2. 論文標題 歌舞伎の「大向こう」の時代変遷 過去の舞台映像から当時の劇場の空気を感じ取る試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館大学アート・リサーチセンター紀要	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂部裕美子	4. 巻 16巻
2. 論文標題 属性別集計からみる演劇鑑賞者の特徴 - 「人間情報データベース」を用いて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化経済学	6. 最初と最後の頁 20-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 宝塚歌劇団での現役活動期間についての分析
3. 学会等名 文化経済学会 < 日本 >
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 坂部裕美子、米屋尚子
2. 発表標題 劇団公演の経年データ分析の試み
3. 学会等名 文化経済学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 花の命は結構長い - 宝塚歌劇団員の現役活動期間に関する分析
3. 学会等名 日本感性工学会感性商品研究部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 実演芸術（演劇公演）の「実態把握」の現状 - 劇団公演の経年データ分析の序として -
3. 学会等名 統計関連学会連合大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 女性実演芸術家のキャリアに関する分析 - 宝塚歌劇団を例に -
3. 学会等名 2021年統計関連学会連合大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 日本における演劇上演回数の時系列データ作成
3. 学会等名 2020年統計関連学会連合大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 落語の寄席定席番組データの活用と課題
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第5回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 公演データから見る宝塚歌劇団演出家のライフサイクル
3. 学会等名 SASユーザー総会2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 演劇・演芸の通常興行における出演頻度格差に関する集計
3. 学会等名 2019年度統計関連学会連合大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 デジタルアーカイブを用いた演芸興行出演機会の不平等度に関する検証
3. 学会等名 人文科学とコンピュータシンポジウム じんもんこん2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 SASを用いた吉本新喜劇（本公演）の現状分析
3. 学会等名 SASユーザー総会2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 日本商業演劇の上演回数に関する長期時系列データ整備
3. 学会等名 2018年度統計関連学会連合大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂部裕美子
2. 発表標題 歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」の上演パターン
3. 学会等名 SASユーザー総会2017
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 長沢 伸也 編著(第10章を執筆)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 192
3. 書名 感性価値を高める商品開発とブランド戦略 - 感性商品開発の理論から事例まで -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

月刊誌「ESTRELA」((公財)統計情報研究開発センター発行) の隔月連載「伝統芸能興行データ集計・その一里塚」(各号4ページ) に研究成果を掲載した(2018年5月号～2024年3月号)。

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------